

「戦前期日本の金融システム」

寺西重郎(著)

岩波書店 2011年12月6日刊

本書は日本金融史研究の泰斗である寺西重郎教授が公刊された900ページを超える戦前期日本の金融システムに関する大著である。

本書は一般読者に気楽に勧められる軽い内容のものではないし、安価なものでもない。それでも、この画期的な書物は次のような理由から紹介せざるにはいられない。

第一に、本書のような研究書が出版されていることは日本にまだ学問の良心とそれを支える編集者や出版社が残っていることを意味し、その事実にも勇気づけられる。同時に、評者を含めた研究者に対して、安易な出版物を出してしまいがちな風潮を戒めておられるようで、身の引き締まる思いがする。

第二に、歴史は、時代の進捗と同時に常に振り返って見直すべきものであるということを教えてくれる。著者は個々の論点に対して、過去の解釈の一方に軍配を上げるのではなく、現代経済学あるいは政治経済学の最近の成果を背景に、丁寧な吟味をし、解釈を加えている。著者によって日本の金融史は新しい姿を表したといっても過言ではない。しかも、著者はそれを暫定的な解釈であると述べる謙虚さを忘れてはいない。

本書のような大著の要約は難しいが、著者は、「戦前期日本の金融システムの変化メカニズムは、所与の人々の思想ないし人々が用いる認知モデルと政治制度のもとでの諸階層の利害の集約の仕方に依存する」とまとめている。さらに、「金融市場は富裕層と中間層の長期性貯蓄を動員し、近代産業に対する長期資金の供給と企業統治において大きな役割を果たした。他方、農業をはじめとする在来産業の金融は銀行に負っていた」ことも明らかにしている。

日本の金融システムは失敗しては学習をするという経験を繰り返しており、決して安定的なシステムなど存在しなかったし、今後も変化を遂げていくだろう。著者の方法論を見習って、我々も将来にわたって、歴史の再評価を繰り返し、金融システムの安定化に向けた施策を考えざるを得ない。本書の最も魅力的な部分は金融システムの細部にわたる著者のこだわりであり、そこから多くのものを学べるはずである。